

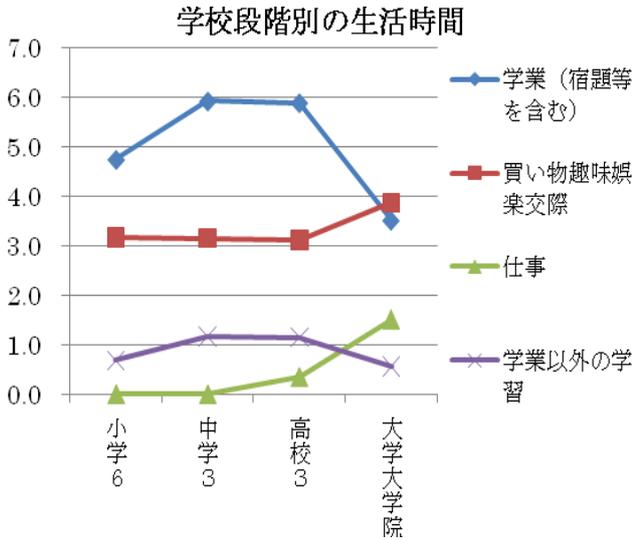
# 大学教育の基本課題

中教審 教育振興基本計画部会  
2011年10月6日 金子元久

## 1. 日本の大学生 — 学習時間が少ない

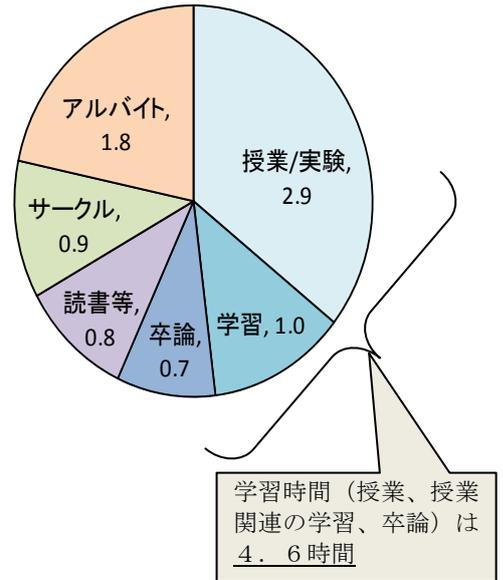
●小中高生より、大学生の学習時間が少ない

●一日の学習時間は5時間弱



出所：総理府『社会生活基本調査』平成18年

大学生の生活時間 (計8.2時間)



出所：東京大学大学経営政策研究センター(CRUMP) 『全国大学生調査』2006-8年、サンプル数44,905人 <http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/>

●大学設置基準の想定している学習量は約8時間。 現実はそのほぼ半分

日本の学生は 「フル・タイム」ではない

●国際的にみても、学習時間が少ない

### アメリカとの比較

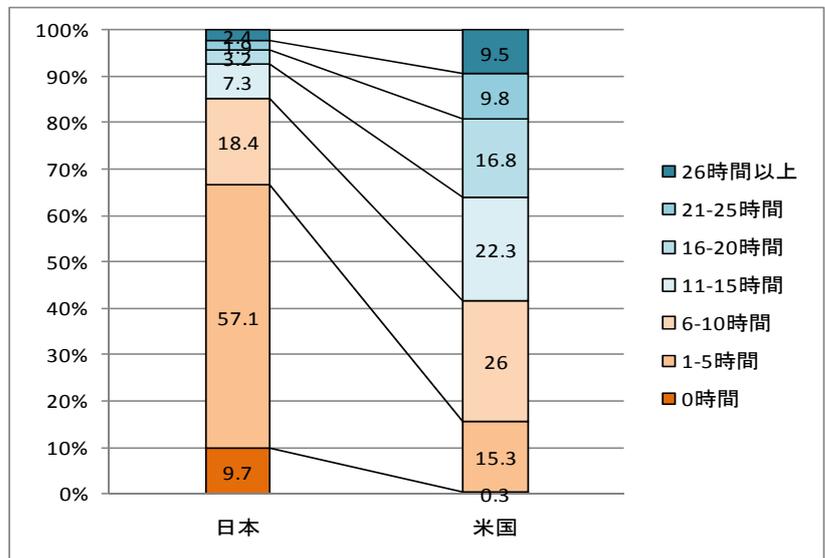
日本の大学設置基準は、基本的に戦後のアメリカの基準を援用。1950年代のアメリカの大学生の調査によると、実際にこの程度勉強していた。現在の学生と比べても、日本の方が少ない。

### ヨーロッパ

ヨーロッパ単位互換制度(ECTS)もほぼ一週間で40時間の学習量を想定。国際的基準の半分しか学習していない。

データ：『全国大学生調査』およびNSSE

授業に関連する学習の時間 (1週間あたり) 日本とアメリカ 1年生

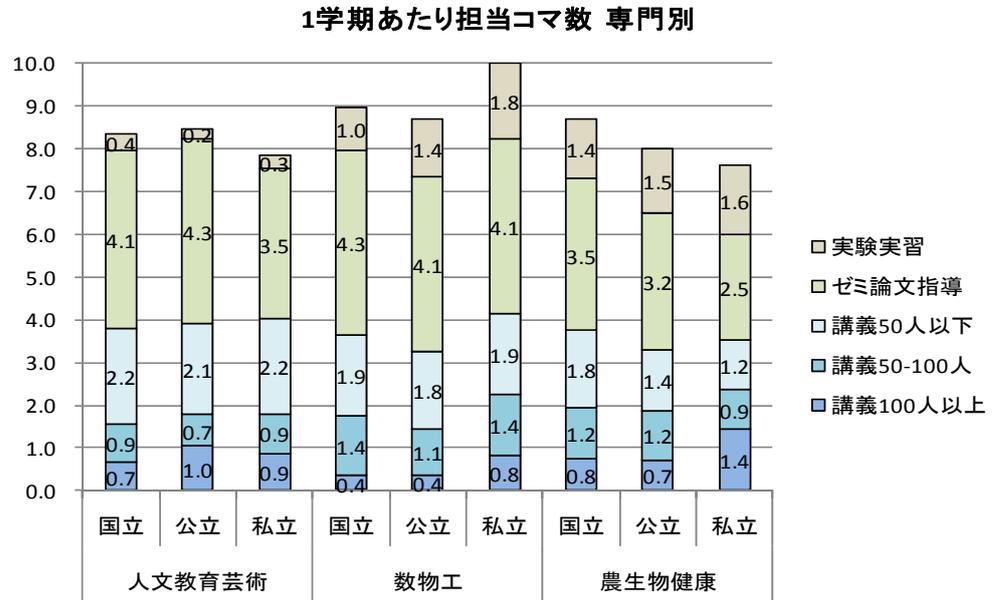


## 2. 大学教育のどこが問題か

### ●教員は怠慢なわけではない 担当授業数が多い

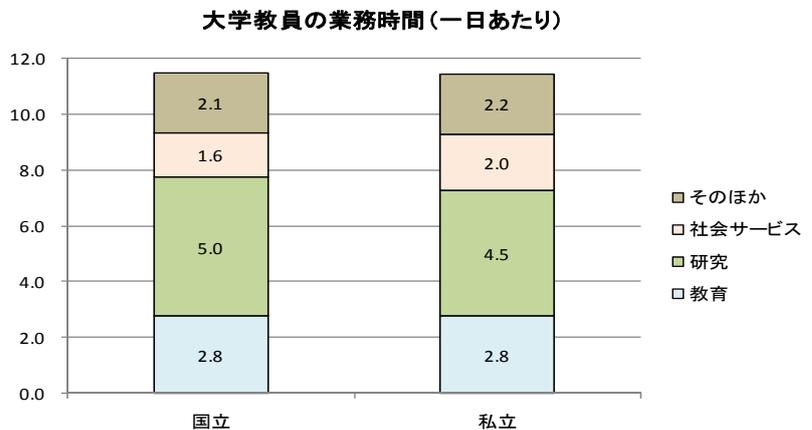
一学期 8 コマ以上を担当。アメリカの 2-4 コマと比べて、きわめて多い。

ただし、ゼミ、論文指導の数がきわめて多い。大学院の負担も多い気



データ： CRUMP『全国大学教員調査』2010

### 他方で、教育にかけている時間は少ない



データ： 文科省「大学等におけるフルタイム換算データに関する調査」2008年度

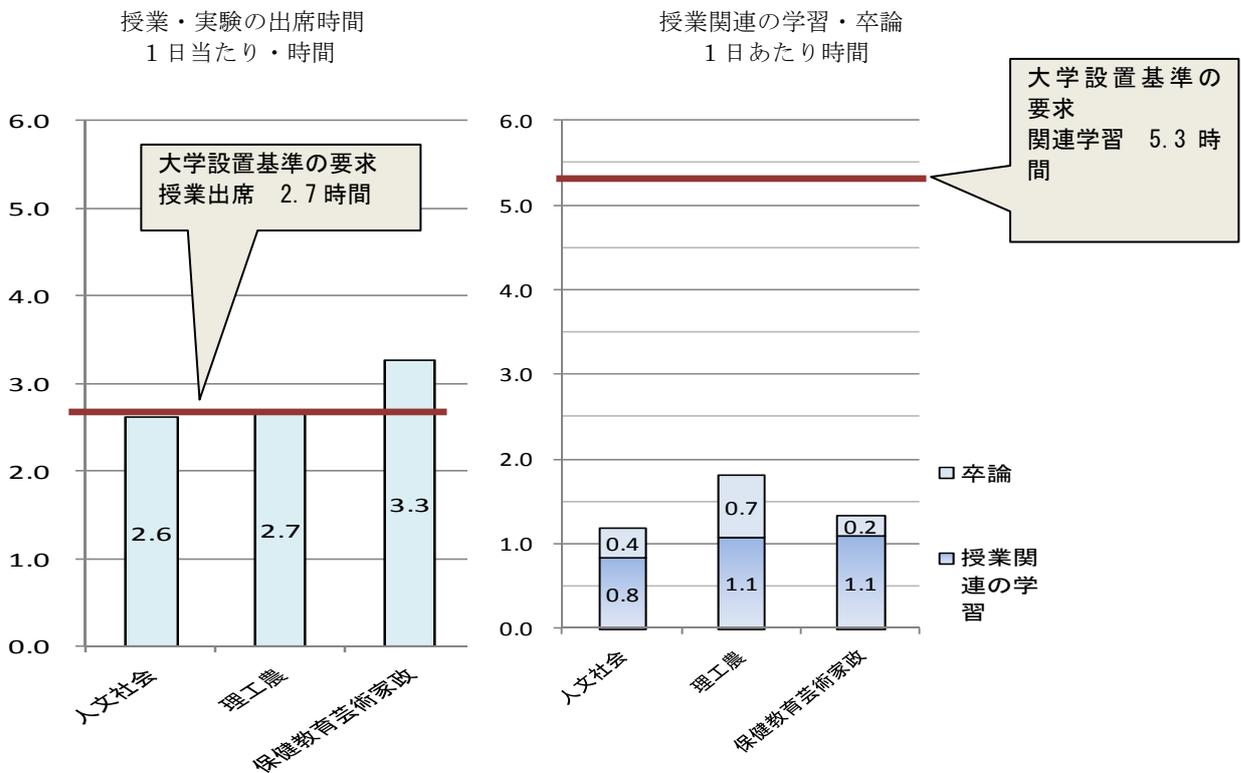
### 日本の特質 —ゼミ、論文指導などに力点。

少人数でのインフォーマルな学習に力を入れる。

卒業論文・研究が重要。

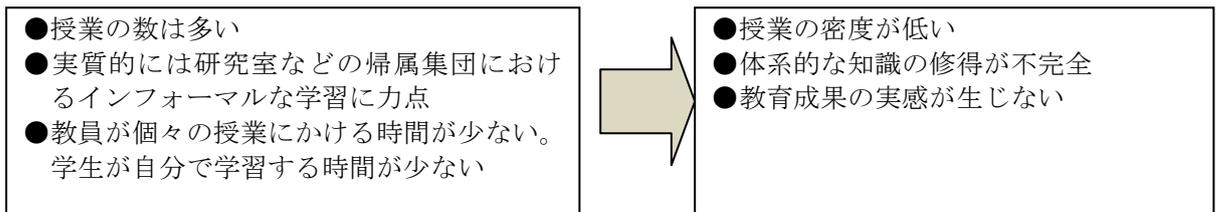
それによって、学術的、人格的成長をうながす

●しかし結果として、学生の「授業に関する学習」は少ない



学生は授業には出ているが、自分で学習していない、卒業論文も実際にかけている時間は少ない

●日本の大学教育と、その問題点



●これまでの大学教育改革の成果と課題

個別の工夫は行われてきた。

初年度教育、FD、GPAなど。教員も教員に熱心になってきつつある。GPの成果  
しかし、これらはいわば「小道具」

構造的、基本的な問題は残っている

個別教員の努力、視野には限界

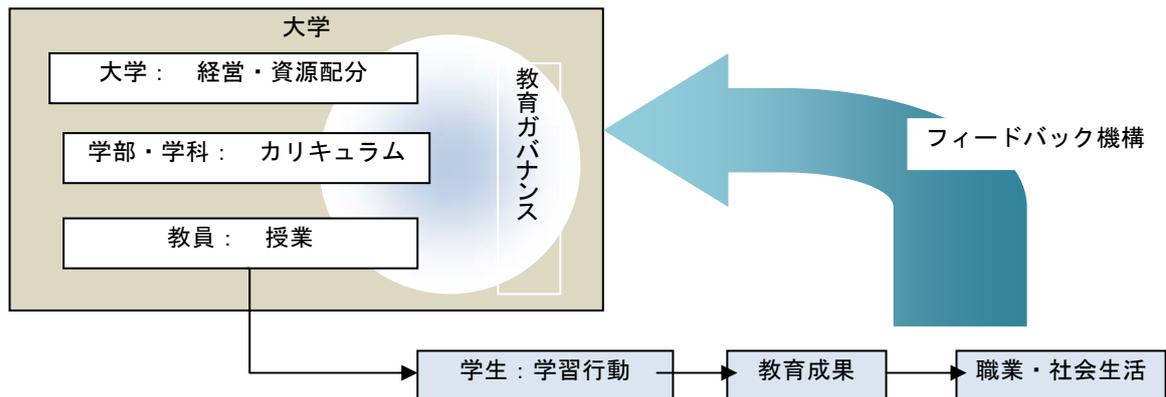
標準的な正解はない。 個別大学での試行、革新が重要

### 3. 高等教育の課題 — 革新を生じさせるメカニズムの形成

#### 政策的課題

- 当面の目標
- 改革の方向性の提示
- 具体的な改革手段

#### ①マクロ — 社会的なフィードバックが必要



#### ②ミクロ — 個別大学での大学教育革新

##### 障害：大学の教育ガバナンス

- 教育は基本的に学部の専権事項 — カリキュラム、成績、卒業認定
- 学問領域の論理、構成員の要求に左右される
- 個々の授業 — 個々の教員に帰属 — 教員自身の専門性、信念にもとづく
- 教育プログラムの全体としての一貫したガバナンスが不在
- 教育効果の評価 — 資源配分、のフィードバックが機能しない

##### 学士課程教育が「学部」の専権事項となっているのは国際的にも少ない

アメリカ

- 学士課程教育は、基本的に大学全体ないし「カレッジ」として一元的に管理
- 学科 (department) は研究、大学院の単位
- 学士課程の授業は出すが、カリキュラム全体を統制するわけではない
- 大学・学長が強いリーダーシップを発揮する
- 社会が大学を評価するのは基本的には学士課程教育
- 歴史的に有名な大学教育改革は、学長のリーダーシップで行われた

##### 大学内での革新のメカニズムを形成する必要

#### ③メゾ — 教育改革の支援メカニズムの形成

- 大学教育の現実のプロセス、アウトカムの調査・分析、大学間のベンチマーキング
- それにもとづく問題点の提起、方向の提示
- 改革のインセンティブの形成